実践報告

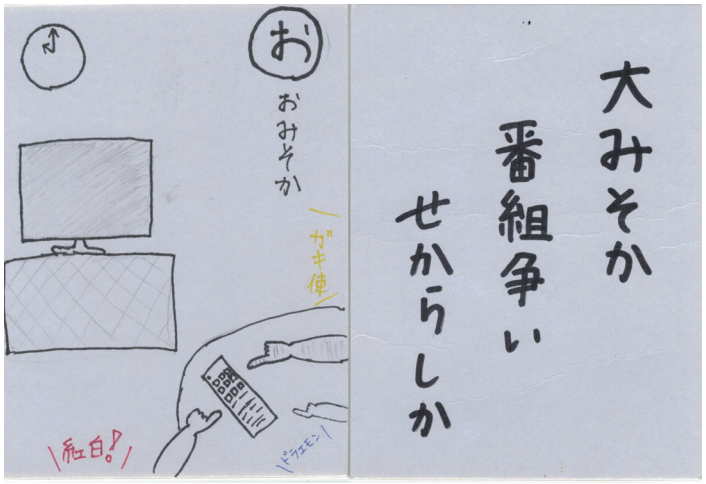
# 「我が国の言語文化」としての長崎方言を学び、詩の鑑賞・創作を通して語彙力と表現力を高め、郷土愛を育てる小学校国語授業の研究

平瀬正賢・前田桂子（長崎大学教育学部）、
森下幸子・橋元良太・中村慧亮（長崎大学教育学部附属小学校）

## はじめに

平成２８年度、２９年度は長崎大学教育学部附属中学校で、「伝統的な言語文化」としての方言をテーマに調べ学習を行い、平成３０年度は附属小学校６年生のクラスで、「我が国の言語文化」としての長崎方言を学び、地域と歴史への理解を深め、表現力を高める小学校国語授業の研究に取り組んだ。

方言は、生まれたときから耳にする地域に密着したことばでありながら、現代社会においては衰退が著しく、かつて標準語教育の活性化のために、虐げられてきたという歴史がある。しかし近年、消滅に危機感をもたれ、国語科の学習指導要領でも「伝統的な言語文化」として、あるいは「我が国の言語文化」として再認識されている。




昨年度は、「共通語との違いや世代差、言葉の変化を知り、方言の味わいを感じることを目的」として、方言俳句かるた作りを行い、次のようなことが見えてきた。

・小学生が知っている方言語彙には限りがあり、思いを十分に表現するのは難しいが、助詞や終助詞、条件表現などの文法形式に着目したことによって、句作が容易になることに気付いた。

・子どもたちは、方言独特の味わい深さから、方言は家族や地域とつながる温かい言葉であると気付いたようである。

・外来語由来の方言からは、中世近世の長崎における異国文化が窺え、郷土の歴史に親しみを感じたようである。[1]

そこで、今年度はさらに下の学年である中学年に対象を移し、小学校４年生に方言詩を創作・鑑賞する試みを行う。

## １．目的と方法

令和２年度から全面実施される新学習指導要領においては、「我が国の言語文化に関する事項」として、「言葉の由来や変化」が位置付けられている。中でも「第５学年及び第６学年」には、次のような事項が記載されている。（下線部、引用者。以下、同。）

ウ　語句の由来などに関心を持つとともに、時間の経過による言葉の変化や世代による言葉の違いに気付き、共通語と方言との違いを理解すること。また、仮名及び漢字の由来、特質などについて理解すること。

新学習指導要領の「指導計画の作成と内容の取扱い」には、「各学年の内容の指導」について、「必要に応じて当該学年より前の学年において初歩的な形で取り上げたり、（中略―引用者）弾力的に指導すること」との記載がある。また、昨年度の子どもたちを対象にした方言調査から、「基本的な文法形式は定着」しており、「方言的要素がしっかり残っ」ている結果をふまえ、対象を中学年に移しても高学年の「言葉の由来や変化」につながる学習に対応できると判断した。そこで、詩の鑑賞・創作を通して、「共通語との違いや世代差、言葉の変化を知り、方言の味わいを感じること」の基礎を養うことを目的とした実践研究を行うこととした。

まず、４年生の教科書掲載の詩「のはらうた」を用いた授業を行う。これは、詩人の工藤直子が、野原に暮らすさまざまな人物を思い浮かべ、「野原の住人」になりきって作った詩であり、音読することで詩の世界を楽しみながら鑑賞することが容易な教材である。次に、子どもたち一人ひとりが「のはらうた」に倣って「野原の住人」になりきり、日常の生活語を用いて詩を創作して感想を共有する。教科書には一部の詩しか掲載されていないが、童話屋から出版されている『のはらうたⅠ～Ⅴ』、『版画のはらうたⅠ～Ⅴ』等を参照することで、さらに豊かな詩の世界を味わうことが可能である。

工藤直子は「『のはらうた』のできたわけ」として、『のはらうたⅠ』の冒頭で、「のはらむらのみんなが　しゃべるたびに、　うたうたびに、　わたしは　それを　かきとめました。/そのうたが　たまって　ほんになったのが、　『のはらうた』です」[2]と述べており、「のはらうた」の表現のベースが話し言葉であることがわかる。「のはらうた」に倣い、「野原の住人」になりきり、詩を創作するということは、子どもたちが日常的に耳にしたり口にしたりしている生活語（＝方言）をベースに創作することを意味する。日本全国共通に使われている言葉ではなく、長崎の地に暮らす子どもたちが使っている生活語（＝方言）による詩の創作・鑑賞を通して、自らの言葉に自覚的な目を向けさせ、「共通語との違いや世代差、言葉の変化を知り、方言の味わいを感じること」の基礎を養いたい。

授業に先立って『のはらうたⅠ～Ⅴ』、『版画のはらうたⅠ～Ⅴ』の複数セットを学級文庫に配架して、「のはらうた」への興味を醸成するとともに、小学生向けの方言に関する参考図書も配架し、日常の言葉に目を向ける環境を整備する。

管見によれば、小学４年生を対象に教科書教材である「のはらうた」[3]を活用した創作・鑑賞指導はあるものの、子どもたちの日常言語である生活語（方言）を意識したものは確認できていない。同じく工藤直子が編んだ『子どもがつくるのはらうた１～３』（童話屋）には、小学１～６年生までの詩が掲載されているが、生活語を意識して創作したものは見られない。また、浜本純逸による『現代若者方言集』（大修館書店）は、「方言」で創作された詩集であるが、作者は全国の大学生である。本実践の独自性の一端は、ここにある。

## ２．附属小学校での授業内容

本プロジェクトの概要は次の通りである。本計画は国語科教育の面から平瀬が監修をし、授業は附属小学校国語部の協力を得ながら森下が行い、方言指導は前田がそれぞれ担当した。

【学習課題】長崎に伝わる言葉の意味や使い方を学習し、オリジナル「のはらうた」を作ろう。

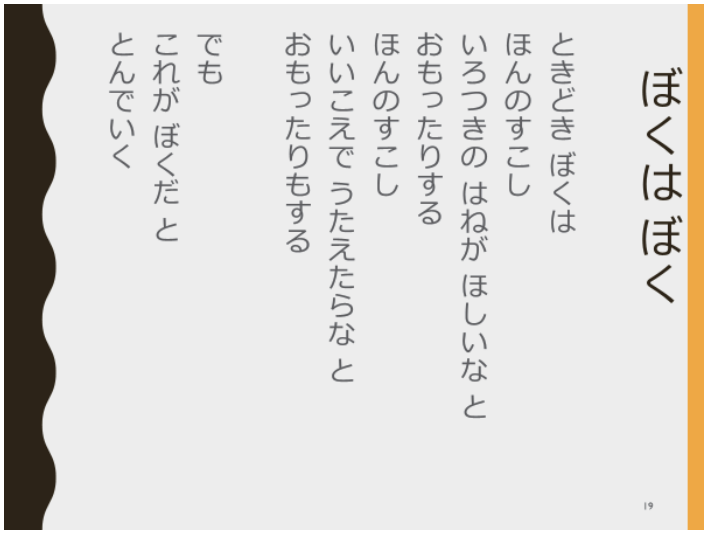
【授業日程及び概要】

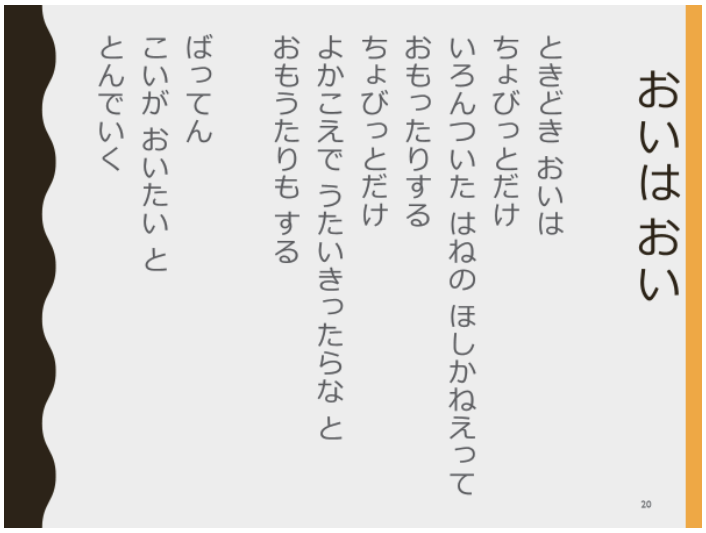
| | 日程 | 授業者 | 概　　要 |
|---|---|---|---|
| 第１時 | １２月２日<br>３校時 | 森下 | 〈めあて：長崎に伝わる言葉の意味や使い方を学習し、オリジナル「のはらうた」を作ろう。〉<br>「のはらうた」と長崎方言で表現された「のはらうた」を比較して味わうことで、長崎方言による創作活動に意欲を持つとともに、学習課題を立てることができる。 |
| 第２時 | １２月３日<br>２校時 | 森下 | 〈めあて：のはらの生きものになりきって詩を作ろう。〉<br>「のはらうた」と長崎方言で表現された「のはらうた」を比較して、方言詩創作の見通しを持ち、「のはら」の住人になりきって、詩を構想する。 |
| 第３時 | １２月４日<br>６校時 | 前田<br>森下 | 〈めあて：方言について知ろう。〉<br>長崎方言についての理解を深め、日常生活の中で知らないうちに方言を使っていることに気付く。 |
| 第４時 | １２月５日<br>６校時 | 森下<br>前田 | 〈めあて：自分でつくった詩の言葉を方言になおして方言詩をつくろう。〉<br>前時までに作った詩をもとに、配布した資料や辞典を参考にしたり、教育学部の前田 |

| | | | |
|---|---|---|---|
| | | | に尋ねたりして方言詩をつくる。 |
| 第５時 | １２月６日<br>４校時 | 森下<br>前田 | 〈めあて：方言詩をすいこうして色紙に清書しよう。〉<br>リズムにも注意して方言詩の推敲をする。完成したら色紙に清書する。方言で悩んでいる子には、適宜アドバイスをする。 |
| 第６時 | １２月９日<br>１校時 | 森下 | 〈めあて：友達と方言詩を読み合って感想を伝え合おう。〉<br>各自が色紙に書いた方言詩を読み合い、感想を共有する。総括として、方言詩に取組んだ感想を尋ね、方言と共通語の違いや、方言の味わいについて振り返る。 |

### ３－１　第１時の授業内容（授業担当：森下）

第１時は、「のはらうた」を読み、オリジナルの長崎方言「のはらうた」をつくることに関心を持たせると共に、学習の見通しを持たせた。以下に授業資料の一部を挙げる。




まず、学級文庫にも配架していた『のはらうた』から、「ぼくはぼく」を紹介した。文中の「ぼく」は誰か、表現を根拠にイメージを広げた上で、作者が「からすえいぞう」であることを告げ、詩の中の言葉をつないでいくと作者が見えてくることを確認した。

次に、長崎方言バージョンの「おいはおい」を紹介した。子どもたちからは、「スーパーに、長崎のブランドで〈食べてみんね〉ってある。」「『ぼくはぼく』の九州バージョンだ。」との声があがった。

表現が変わると詩の表すイメージも変わってくることを確認した上で、全員に二編の詩を配布して、比較して気付いたこと、感じたことをノー

トに書かせた。

このうち、「ぼくはぼく」について、「現代風」、「標準語で書いてある」、「子どものからす」、「やさしいからす」といった意見が、「おいはおい」について、「昔風」、「おじいちゃんのからす」、「昔じゃなくて県によって違う」、「少し乱暴なからす」といった声があがった。「九州バージョン」や「県によって違う」という声もあったが、耳慣れない表現から「おじいちゃん」や「少し乱暴」といったイメージに結び付いたようである。

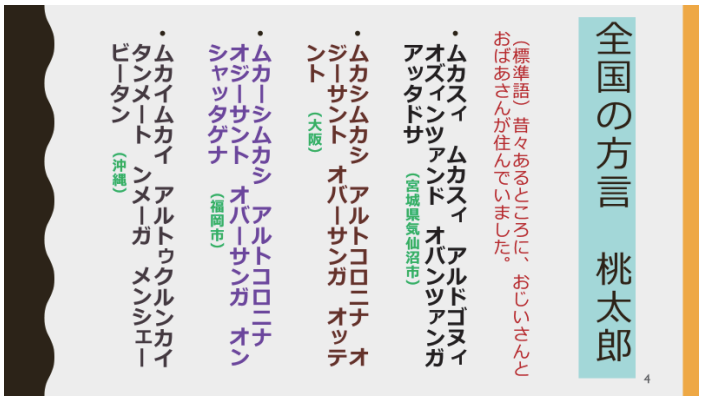
続いて、「おいはおい」の詩はいつも使っている言葉で作られたもので、このような言葉を「方言」と呼ぶことを確認し、オリジナルの長崎方言「のはらうた」を作る学習課題と計画を立てた。

### ３－２　第２時の授業内容（授業担当：森下）

前時に続いて、方言詩創作のモデルとして、『のはらうた』から、「おれはかまきり」と長崎弁に直した「おいはおがみたろう」を紹介した。創作の方法として、すぐには「おいはおがみたろう」のように書けないので、いつも使っている言葉で詩を書いて、それに手を加えることを提案した。

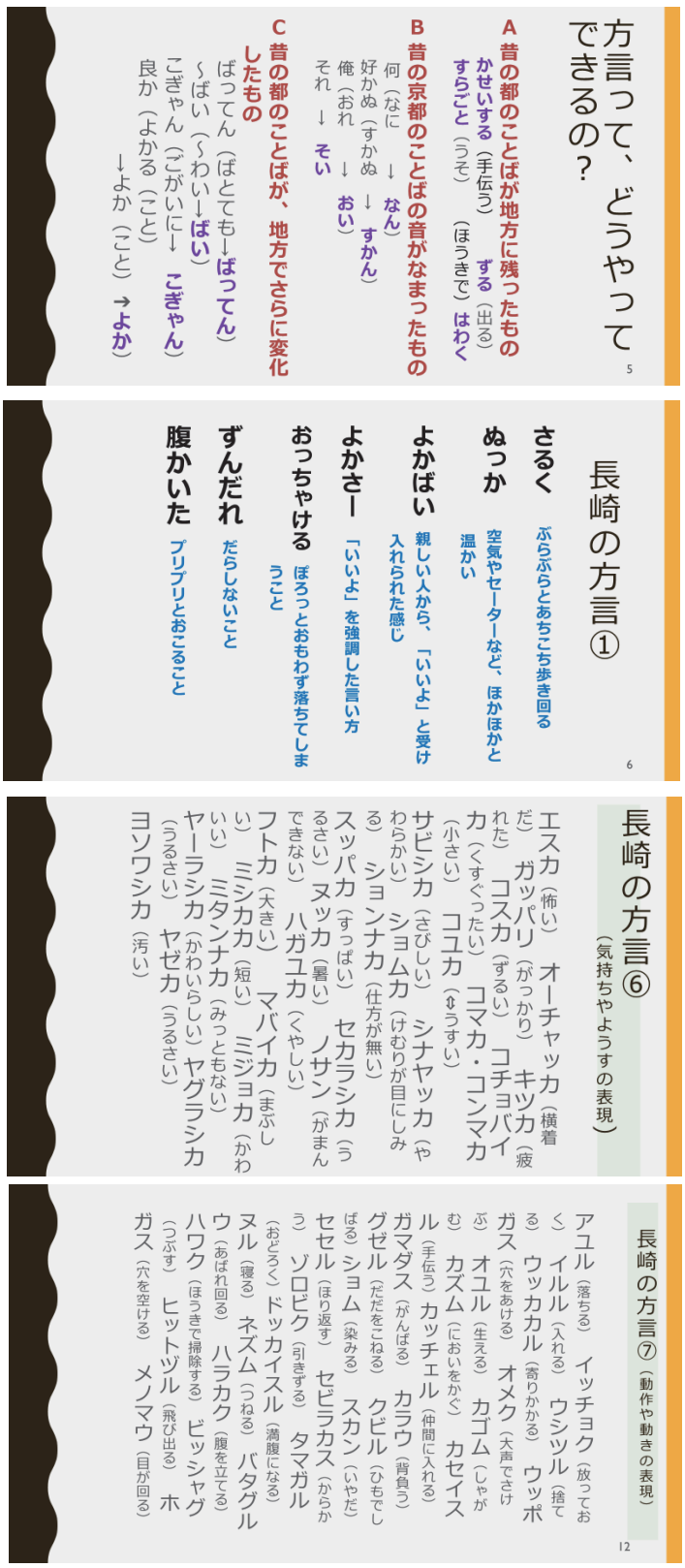
まず、作者のように、何になりきって詩を書くのかを考え、『のはらうた』の中の詩も参考にしながら、詩の構想を練った。授業の終わりには、大部分の子どもが何になりきるか決めていたが、実際に詩を作った子どもは少数であった。

### ３－３　第３時の授業内容（授業担当：前田、森下）




第３時は、教育学部の前田が中心となり、長崎方言についての理解を深めた。ＮＨＫのＥテレでも紹介されている「でんでらりゅー」について、「竜」のことだと思っている子どもは少数であったが、映像を視聴後、あらためてスライドでどのような方言が出てくるか確認して授業の導入とした。

次に、昨年度６年生で行った学習と同様に、全国の方言について理解を深めるために、「桃太郎」の話を各地の方言に直したものを音読して紹介した。　宮城県気仙沼市、大阪




市、福岡市、那覇市を取り上げて音読したところ、「何か偉そうな言い方」とか「聞いたことある」等の言葉が飛び交い、沖縄については言葉が理解できずに多くの子どもが驚いていた。

さらに、方言のでき方として、「昔の都のことばが地方に残ったもの」、「昔の京都のことばの音がなまったもの」、「昔の都のことばが、地方でさらに変化したもの」の三パターンを紹介し、長崎方言の具体的な語形をいくつか紹介した。これらに共通していることは、全て「昔」が関係していることであり、昔の言葉が消えずに何とか残っており、そのうち消えてしまうかもしれないものが方言であることを確認した。

続いて長崎方言を紹介した。まず、子どもたちにも馴染みのある表現を取り上げ、共通語と方言の違いについて考えた。「よかさー」と「いいよ」の違いから、言葉のニュアンスやイメージが変わってくることを確認し、そのことを詩の創作に生かしてほしいと伝えた。

子どもたちは、日常生活で耳にする表現を見つけたあたりからスライド中の表現を口々に言い始めた。当初、方言は使わないと思っていた子どもたちも、知らないうちに使用しており、生活の中に根付いていることに気付いたようである。また、「のはらうた」の創作にあたり、役に立ちそうな「気持ちやようすの表現」、「動作や動きの表現」も紹介した。それぞれ用例と

あわせて紹介したところ、子どもたちから、生活の中で「使う」、「使わない」等、活発な反応が見られた。

最後に、方言詩の創作に向けて、次のような説明をして授業を締めくくった。

・資料にあるような単語を使っていくと方言詩になる。

・知っている方言を最初から使って、詩を作っても良い。

・全て方言に直さなくても良い。

・詩の中に単語がいくつかあるだけで全体が方言らしくなり、味わいが出てくる。

### ３－４　第４・５時の授業内容（授業担当：森下、前田）

前時までの学習をふまえて、自分のつくった詩を方言詩に直し、推敲して清書した。活動に入る前に、本単元の冒頭で紹介した「ぼくはぼく」の詩を例に、「言葉をおきかえる」、「語尾をかえる」等のポイントを提示した。また、方言に直したら声に出して読んでみて、リズムが悪くなるようなら周りの文字数等を調整してスムーズに読みやすいように変えてみること、方言を数多く入れる必要は無く、二つ三つでも味わいが出てくることについても触れた。

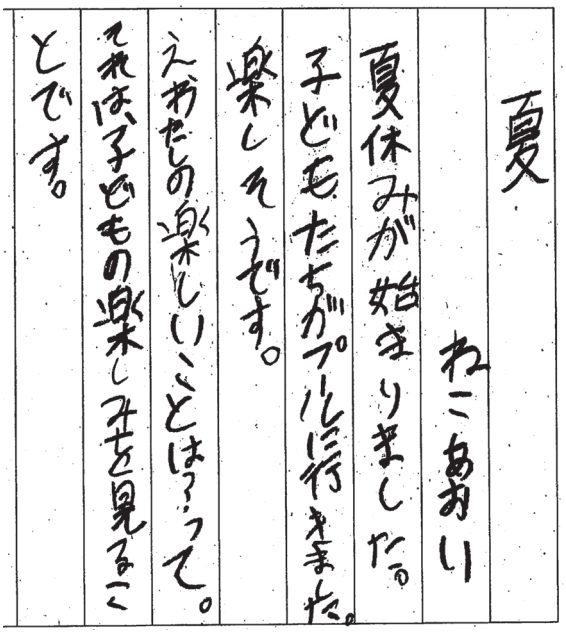
子どもたちは、前時の配付資料や方言辞典等を参考にして、また、わからないところは教育学部の前田に尋ねながら活動を進めた。1 時間の終わりには多くの子どもの方言詩ができており、自分の詩を声に出して紹介した子どもの発表には学級の子どもから歓声が上がっていた。

第５時は、友だちや先生に読んでもらって、方言詩の推敲を行い、イラストも入れて色紙に清書した。子どもたちのつくった方言詩のタイトルとペンネームは次の通りである。

| | | | |
|---|---|---|---|
| 夏 | ねこあおい | 天空へかけのぼれ | たつのこたかし |
| はなのたいそう | いのししはなこ | 空のかぶとむし | むしのかぶと |
| 野原で | しばいぬお | ひまわり | ひまわり航 |
| ライオン | 星のライオン | ネズミの音 | ネズミ晃吉朗 |
| きいちごのあかいみ | きいちごはなこ | コスモス | コスモス花よ |
| ぼくはのびる | ひまわり夏男 | ツバメのにっき帳 | 風天ツバメ |
| ふゆん初めでも… | のばらしずこ | ころころ | 亀申石真作 |
| 冬のおわりに | とうふゆこ | はなのたいそう | ぞうはなこ |
| タンポコ | タンポポ花美 | うさぎのひるねのゆめ | うさぎゆめ |
| なつのちょう | もんしろだいき | おがみたろうのけいかく | |
| アゲハのヒーロー | アゲハゆみあ | かげの道 | かげとらきち |
| ぴょんぴょんあそび | バッタ草太ろう | サングラス道 | サングラスとんび |
| ころがるだんごむし | だんごむしお | ちょう | ちょうへんしん |
| もしもし地球 | 地球(ほし)のせんいち | かわべのまつり | ホタルまどか |

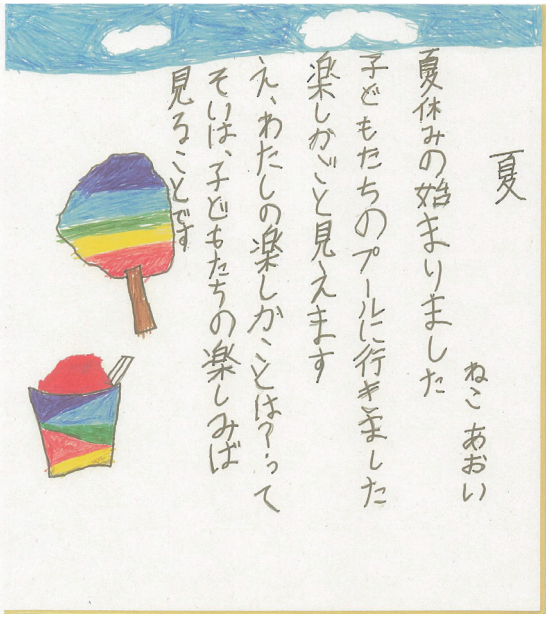
これを見ると、多くの子どもが『のはらうた』の特徴をとらえて、「のはら」の住人になりきって、詩の世界を創り上げていったことが読み取れる。

例えば、冒頭の「夏」は、次のように下書きにイラストが加えられて清書された。「夏休みの」や「子どもたちの」、「楽しみば」に見られるような助詞の置き換え、「楽しかこと」のような形容詞の語尾を変えることで、長崎方言の特徴が顕著になっていることがわかる。


夏

ねこあおい

夏休みが始まりました。
子どもたちがプールに行きました。
楽しかこと。
えわたしの楽しかことは？って。
それは、子どもの楽しみを見ること
とです。

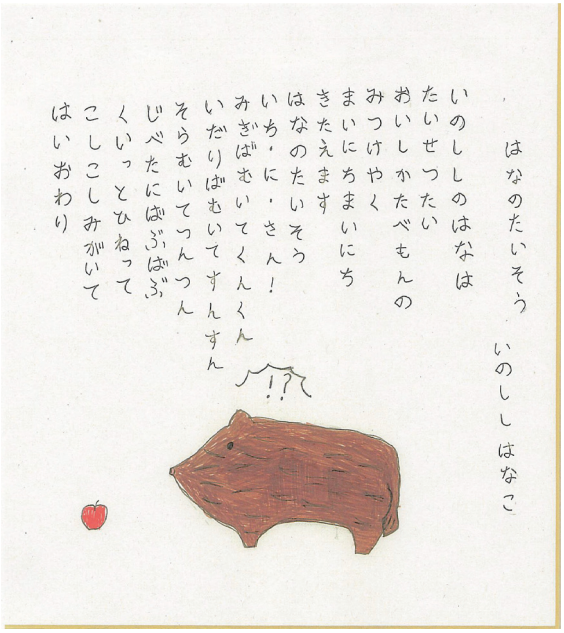

夏

ねこあおい

夏休みの始まりました
子どもたちのプールに行きました
楽しかこと見えます
え、わたしの楽しかことは？って
そりゃ、子どもたちの楽しみば
見ることです

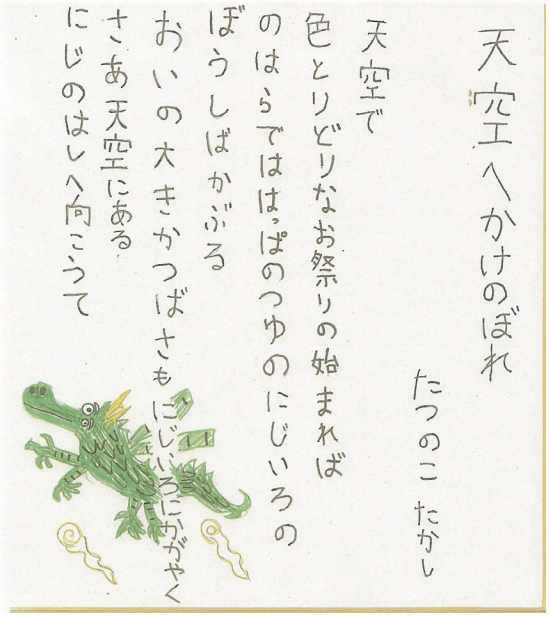
子どもたちは、友だちや先生に尋ねて、下書きを何度も声に出しながら推敲し、イラストも添えて楽しみながら清書していった。

ここでは、紙面の関係で４名の作品を次に挙げる。


はなのたいそう

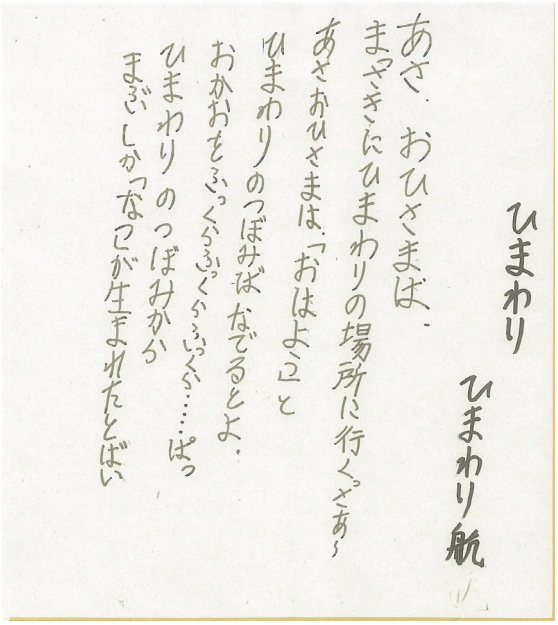
いのしし はなこ

いのししのはなは
たいせつたい
おいしかたべもんの
みつけやく
まいにちまいにち
きたえます
はなのたいそう
いち・に・さん！
みぎばむいてくんくん
いだりばむいてすんすん
そらむいてつんつん
じべたにぱぶぱぶ
くいっとひねって
こしこしみがいて
はいおわり

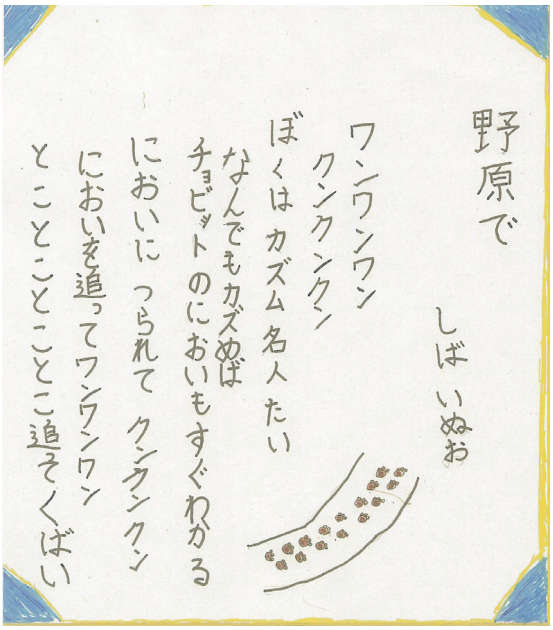

天空へかけのぼれ

たつのこ たかし

天空で
色とりどりなお祭りの始まれば
のはらではは っぱのつゆのにじいろの
ぼうしばかぶる
おいの大きかつばさもにじいろにかがやく
さあ天空にある
にじのはしへ向こうて


ひまわり
ひまわり航

あさ、おひさまば、
まやきにひまわりの場所に行くぞあ～
あさおひさまは、「おはよ、」と
ひまわりのつぼみば なでるとよ、
おかおをふっくらふっくらふっくら……ぱっ
ひまわりのつぼみかが
まぶしかっなつが生まれたとばい


野原で
しば いぬお

ワンワンワン
クンクンクン
ぼくは カズム名人たい
なんでもカズめば
チョビットのにおいもすぐわかる
においに つられて クンクンクン
においを追ってワンワンワン
とことことこ追そくばい

いずれの詩も長崎弁らしいリズムが生きており、方言の味わいが子どもたちの中に根付いていくことが期待されるものとなっていた。

### ３－５　第６時の授業内容（授業担当：森下）

各自が色紙に書いた方言詩を読み合い、感想を共有した。友達の方言詩を声に出して読むよう促すことで、子どもたちは、言葉のリズムや面白さに気付くことができた。そして、方言で表現した詩とそうでない詩を比較して、方言詩にはどのようなよさがあるのか考えたことを伝え合った。子どもたちは、方言を使うと温かい感じがする、親しみやすいといった感想を抱いていた。また、学習前は、「お年寄りが使う言葉」「分かりにくい言葉」といったイメージを思い浮かべていたが、実際に使ってみると、自分たちが使っている言葉にも多くの方言があることを理解することができた。

## おわりに

単元の学習後、子どもたちは教育学部の前田にお礼の手紙を書いた。その中で、先程の方言詩を創作した子ども達は、次のように感想を綴っている。

・わたしは、身ぢかな言葉でも方言を使っているということを知ってとってもびっくりしました。その中でもびっくりしたのが、「からう」や「直す」です。これから家ぞくでも方言を話してみたいなと思います。

・長崎県以外の都道府県の方言を知ることができて、良かったです。そして、方言は、地域によってとても変わるんだなと思いました。これからも方言をつかっていきたいです。

・ぼくはあまり方言のことについて知らなかったので前田先生に方言のこと

を教えてもらい方言のことについてくわしくわかりました。ほかにもこれは方言じゃないと思っていたものが方言だったのでとてもおどろきました。

・ぼくは、今まで、「ランドセルをからう」といっていましたがそれは、方言だとしってびっくりしました。長崎は「～か・～たい」などが付くということも知りました。前田先生が「方言が消える」といっていてびっくりしました。

これらを見ると、「のはらうた」をベースに、日常の生活語に自覚的な目を向け、長崎方言を用いて詩の創作・鑑賞を行った今回の活動を好意的に受け止めていることがわかる。子どもたちは、自分たちが無意識の内に方言を使用していること、地域によって使用する言葉に特徴があり、生活に密着した言葉が方言となっていること、将来的に方言は消滅するかもしれないことを知り、身近な生活語である方言の大切さに気付くと共に、郷土の言葉としてこれからも使っていきたいとの思いを新たにしている。さらに、共通語と方言との語感の違いなどにも目を向けながら、表現を練り、方言詩の創作・鑑賞をしたことで、言葉の持つ独特のニュアンスや細やかな心情表現、情景描写等について工夫しようとする意識を養うことにもつながったようである。

今後も、方言教育の長崎スタイルとして県内の国語教育の向上を目指した取り組みの継続と開発に努めたい。

---

[1] 前田桂子・平瀬正賢・橋元良太（2019）「『我が国の言語文化』としての長崎方言を学び、地域と歴史への理解を深め、表現力を高める小学校国語授業の研究」『長崎大学教育学部教育実践研究紀要第 18 号』長崎大学教育学部　p.9

[2] 工藤直子（1984）『のはらうたⅠ』童話屋　p.5

[3] 『国語４下』光村図書　pp.70-73

購入書一覧

工藤直子『のはらうたⅠ～Ⅴ』童話屋（各５冊）

工藤直子『版画のはらうたⅠ～Ⅴ』童話屋（各１冊）

長崎県小学校教育研究会国語部編『読みがたり長崎のむかし話』日本標準（各２冊）

太田大八『だいちゃんとうみ』福音館書店（各２冊）

佐藤亮一編『都道府県別全国方言辞典』三省堂（各２冊）

参考文献

全国大学国語教育学会（2013）『国語科教育学研究の成果と展望Ⅱ』学芸図書

浜本純逸（2005）『現代若者方言集』大修館書店

工藤直子（2006）『子どもがつくる のはらうた①』童話屋

工藤直子（2007）『子どもがつくる のはらうた②』童話屋

工藤直子（2008）『子どもがつくる のはらうた③』童話屋

＊本研究は令和元年度長崎大学教育学部研究企画推進委員会プロジェクトの助成を受けています。